

ニーチェの永遠回帰思想について

坂本 耕一郎

はじめに

同一物が永遠に回帰するというニーチェの永遠回帰思想は、ヨーロッパのニヒリズムの克服をめざす彼の哲学的営為にとって、決定的な意味と役割を担うものである。このことは、ニーチェ自身が著作の中で断言していることであり、また、この思想を途方もない情熱をもって堅持していたという伝記的事実からも明らかである。

しかしながら、その永遠回帰思想の内実は、ニーチェその人によってさえ直接的に語られることはなく、常にある秘密の知として比喩的・象徴的に語られているに過ぎない。そしてこのことは、ニーチェ解釈史におけるニーチェ像の転変を引き起こしてきた原因の一つとなっている。

本論者は、永遠回帰思想のこのような性格を踏まえた上で、この思想の内実にいささかなりとも接近しようとするものである。そのために、まず(1)ニーチェのニヒリズム論を後期の遺稿群をたよりに概観する。その上で(2)『ツァラトゥストラはこう言った』第3部の2つの章(「幻影と謎について」と「回復しつつある者」)を主たるテキストとして、ツァラトゥストラの永遠回帰思想との対決とその克服について解釈し、永遠に回帰する世界との一体化の境地について論ずることとする。

(1) ニーチェのニヒリズム論

A. 「神の死」

ニーチェの言う「神の死」とは、さしあたっては、キリスト教の神の死んだこと、つまり、キリスト教の神が信じるに値しなくなったことを意味する。そして、キリスト教の神への信仰が失われれば、キリスト教道徳もその効力を失う。なぜなら、キリスト教道徳はその起源を神の「超越的」な「命令」におく以上、それは「神が真理である場合にのみ真理」を持っているにすぎないからである^(注1)。宗教としてのキリスト教は道徳としてのキリスト教と不可分の関係にあるのだから、「神の死」とは、キリスト教の神とその道徳とが、二つながら実は死んでいることを意味するのである。

「神の死」と言われるときのその「神」とは、直接的にはキリスト教の神を指し、その「神の死」によって、それに依存する道徳も無効になるわけであるが、しかしそれのみにとどまらない。なぜなら、ニーチェはキリスト教の「神」ということで形而上学的な諸価値をも言い当てようとしているからである。ニーチェはキリスト教を「民衆向きのプラトン主義」^(注2)と呼び、また、プラトンに「先在キリスト教的なもの」^(注3)を認め、プラトン主義の形而上学とキリスト教をいわば同一視している。このようなニーチェのプラトン解釈

の当否はともかくとして、彼がこのプラトン—キリスト教的形而上学と言うとき意味するものは、感性的・此岸的・地上的なものの上に、超感性的・彼岸的・超地上的な諸価値を置き、そのようにして前者を後者に従属させ、前者を暫定的・非本来的・仮象的とする思考形式のことである。ニーチェは、これを西洋の歴史を貫く根本的な思考形式であり、その要が形而上学的な最高価値であるとしている。そうである以上、「神の死」と言われるときには、プラトン—キリスト教的形而上学とその諸価値の無効が含意されているのである。

上に述べたことから明らかなように、ニーチェにとって宗教と道徳と形而上学とは分かちがたく密接に結びついている。したがって、「神の死」という時の「神」とは、これまでの人間の生を支えていた、言い換えれば、それが隷属していた宗教的・道徳的・形而上学的な超越性の一切を意味する。そして、それが「死」んだということは、人間の生がもはや神の意志によって拘束されることもなく、道徳法則によって導かれることもなく、現象世界の背後にある形而上学的世界によって制約されることもない、という事態を示すことになるのである。その場合、この事態を肯定的に捉える者は、「古い神は死んだ」という知らせに接して、「まるで新しい曙光に照らされでもしたような思いにうたれる」ことである。というのも、新たな冒険が可能になったからである。

「水平線はついに再びわれわれに開けたようだ、まだ明るくなってはいないにしても、われわれの船はついに再び出帆することができる、あらゆる危険を冒して出帆することが出来るのだ。認識者の冒険は、再び許された。海が、われわれの海が、再び眼前に開けた。おそらく、こんなに『開けた海』は、かつてあったためしはないだろう。」^(注4)

しかし、大半の者は「神の死」の知らせを耳にしても、言い換えれば、「開けた海」を前にしても、ただ茫然と眺め途方にくれる。そして、「途方にくれるもののすべて、それが私だ」^(注5)と嘆息するばかりである。なぜなのか、それは、「神の死」がニヒリズムの深淵を垣間見せるからである。すなわち、「神の死」と共に過渡的段階である「心理的状态としてのニヒリズム」が到来するのである。そして、「神の死」を乗り越え、それを完成させることによって、いわば歴史的運動としてのニヒリズムが終結するのである。この事態を以下で概観することにしたい。

B. 心理的状态としてのニヒリズム

ニーチェは「心理的状态」あるいは「病理的な中間状態」^(注6)と呼ぶニヒリズムについて、次のように述べている。

「ニヒリズムとは何を意味するのか？ —— 至高の諸価値がその価値を剝奪されるということ。目標がかけている。『何のために？』への答えがかけている。」^(注7)

「神の死」と共に到来せざるを得ないのは、まずこういう意味でのニヒリズムなのである。すでに見たように、ニーチェの言う「神」とは、従来の人間の生を支え、また人間がそのもとの隷属していた超感性的・彼岸的・超地上的なもの一切の象徴であるから、その「神」を失った人間の生は、もはや何ものからも限定も制限も受けず、反面、支えとなる

ものをなくして、空虚な世界へ投げ出され、「中心からxのうちへところがりこんでいる」^(注8)と感じられることになる。さらに、ニーチェの見るところ、プラトン-キリスト教的世界解釈は、これまで唯一の世界解釈たることを僭称してきた以上、その解釈が崩壊し去るときは、世界そのものが無価値に感じられ、生存のうちにはいかなる「意味」もないかのごとく思われることになろう。これが心理的状态としてのニヒリズムであり、さらにこれは、「2千年の長きにわたってキリスト教徒」^(注9)であったことに対する償いであると述べられる。

C. 歴史的運動としてのニヒリズム

「神の死」と共に到来するニヒリズムとは、上記のように一つの心理状態なのであるが、ニーチェはそれを当然の結果と見なし、さらにこの結果に導く原因をも歴史の中から探り出している。つまりニーチェは、ニヒリズムの到来を必然的なものとして捉えているのである。では、必然的に心理的状态としてのニヒリズムを結果する、その原因とは何なのか。この問いに答えるのがニーチェのもう一つのニヒリズム論、すなわち、歴史的運動としてのニヒリズムなのである。その運動について以下で考えてみたい。

従来の最高の諸価値によって彩られ、理想化（それは同時に単純化でもある）された世界は、「真の世界」とよばれる。それがあるべき世界として祭り上げられると、これまで唯一の現実であった世界は、それとの対立関係の中で、一転して「仮象の世界」へと貶められる。このように、それがいかなるものであれ、あるがままの世界とは別に「真の世界」が想定されることは、「わたしたち自身がそれである世界が大いに疑問視され、その価値が減ぜられる」^(注10)ことに他ならない。このような「真の世界」と「仮象の世界」を対立させる二世界論的な世界解釈、つまりありもしない「真の世界」を虚構し、あるがままの世界を誹謗したこと、これが歴史的運動としてのニヒリズムの始まりだとニーチェは言う。すなわち、常に超越的・彼岸的なもの（「神」あるいは「真の世界」）のみが重視され、あらゆるものの意味づけがそこからおこなわれる限り、あるがままの世界には究極的な重要性が与えられないだけでなく、さらに、その世界は貶められているのである。このようなとき、一旦それらの超越的・彼岸的なものが信じ得ないものになるならば、貶められたあるがままの世界が無意味・無価値に思われるのは必然なのである。

だが何故、「神」は死ななければならなかったのか。ニーチェは「神の死」の次第を次のように説く。すなわち、キリスト教の「神」とその道徳が2千年の長きにわたって育て上げてきた徳のひとつである「誠実性」が、みずから知的に先鋭化し、その結果、当のキリスト教の「神」に反旗を翻したのだ、と。してみれば、「神の死」とは、「キリスト教道徳を信ずることの結果」^(注11)なのであり、キリスト教信仰の必然的結果なのである。ニーチェは次のように言う。キリスト教の歴史の中で「いよいよ厳しく解された誠実性の概念」は「科学的良心」「知的清廉」にまで翻訳され昇華されるにいたった。その結果、自然を「神の善意と庇護」の証のように見ること、歴史を「摂理」に貫かれたものとして、あるいは「倫理的世界秩序」の証明と解釈することはできなくなった。そのような解釈は、良心に

背く、不誠実なこと、詐欺と見なされなければならなくなったのである^(註12)。つまり、「誠実感が、キリスト教によって高度に発達して、すべてのキリスト教的世界解釈と歴史解釈の虚偽や欺瞞に対して嘔吐をもよおす」にいたったのだ、と^(註13)。最終的にこの「誠実性」は、「彼岸とか、『神的』であり、道徳の体現であるかのような事物それ自体とかを措定する権利を、私たちはいささかもってはいないという洞察」^(註14)をもたらすことになる。ニーチェは言う。とすれば、この「洞察」は「神」あるいは「真の世界」と表現されるものの完全な没落（完成された「神の死」）を意味するから、ニーチェは、これを「徹底的ニヒリズム」と呼ぶ。このようにして、プラトン—キリスト教的世界解釈によって超越的価値が初めて措定されて以来続いてきた西洋の歴史的運動としてのニヒリズムが、その同じ歴史の中で育まれてきた「誠実性」によって終結させられるというわけである。

以上まとめて言えば、完成された「神の死」は、「心理的状态」としてのニヒリズムの極致であると同時に、歴史的運動としてのニヒリズムの終局点であり、したがってまた、新しい歴史の出発点であると位置づけることができる。このようなニーチェの歴史観を簡潔に示すのが「いかにして『真の世界』が最後には寓話となったか」と題される次のアフォリズムである。そして、このアフォリズムこそ、ニヒリズムの到来とその克服とを説く、ツァラトゥストラの登場を告知するものなのである。

「真の世界を私たちは除去してしまった。いかなる世界が残ったか？ おそらくは
仮象の世界か？ だが、そうではない！ 真の世界とともに私たちは仮象の世界を
も除去してしまったのである！

（真昼、影の最も短い瞬間。最も長いあいだの誤謬の終焉。人類の頂点。ツァラ
トゥストラの始まり、INCIPIT ZARATUSTRAM）」^(註15)

ニーチェによれば、「一つの誤謬の歴史」、すなわち、プラトン—キリスト教的世界解釈による世界の誹謗の歴史が、その第6段階（上記引用）で幕を閉じる。したがって、ツァラトゥストラの教説は第6段階以降の一つの新たな世界解釈に他ならない。そして、その世界解釈が『ツァラトゥストラはこう言った』における永遠回帰思想なのである。

（2）永遠回帰思想

A. 永遠回帰の世界像の骨子

これまでの考察においては、ニーチェのニヒリズム論がいかなるものか、また、ニヒリズム克服に関して永遠回帰思想はどのような位置を与えられているかを明らかにした。以下では、永遠回帰思想が主題的に語られている『ツァラトゥストラはこう言った』を主たるテキストとし、その解釈を進めていきたい。取り上げるのは『ツァラトゥストラはこう言った』第3部「幻影と謎について」と「回復しつつある者」という章である。この2つの章は、永遠回帰思想を見定めようとする者にとって、極めて重要な箇所である。前者では永遠回帰の世界像の骨子と永遠回帰思想の暗黒面（ニヒリズム）が語られ、後者ではその暗黒面（ニヒリズム）との対決が語られているからである。

「幻影と謎について」では、ツァラトゥストラと彼の不倶戴天の敵たる「重力の精」（小

びと)との対話を通して、永遠回帰の世界像が次のように明かされている。

「見よ、この瞬間を！ 瞬間という名のこの門道から、一本の長い小路が後方へ走っている。われわれの背後に一つの永遠が横たわっているのだ。

一切の諸事物のうちで、起こりうるものは、すでにいつか、起こり、作用し、走り過ぎたにちがいないのではないか？

そして、一切がすでに現存したのであれば、おまえ、小びとは、この瞬間をどう考えるか？ この門道もまた、すでに——現存したにちがいないのではないか？

そして、この瞬間が一切の来たるべき諸事物を自分の結果として引き起こすやうなぐあいに、一切の諸事物は堅く結ばれているのではないか？ したがって——この瞬間は自分をも自分の結果として引き起こすのではないか？

というのは、いっさいの諸事物のうちで、走りうるものは、この外へ通じる長い小路をも——将来いつか走るにちがいないからだ！

そして、月光の中を這うこの緩慢なクモと、この月光そのもの、また相共にささやきながら、永遠の諸事物についてささやきながら、この門道に立つわたしとおまえ、——われわれはすべて、すでに現存したにちがいないのではないか？

——そして、回帰し、われわれの前方の、外へ通じるあの別の小路を、この長いぞっとするほど恐ろしい小路を走り——かくて、われわれは永遠に回帰するにちがいないのではないか？——」^(註16)

ニーチェは永遠回帰の世界像を、ここでは問いの形であまりにも短く要約しているのだから、この世界像はこのままでは理解するのが難しい。そこで、この世界像を理解するために、それを支えている暗黙の前提を明らかにしておきたい。その前提とはこうである。

- (1) 力は無限ではなく有限である。
- (2) 時間は未来と過去の両面にわたって無限である。
- (3) 現在の瞬間は存在の瞬間ではなく、生成の瞬間である。

(1) 力は無限ではなく有限であり、(2) 時間は未来と過去の両面にわたって無限であるなら、力の状態・変化の組み合わせ・発展の数は実際には計り知れないものではあるが、しかし、いずれにしても一定であって無限ではない。ゆえに、ある一定の力の無限に新しい諸変化や諸状態は一つの矛盾となる、とニーチェは言う。さらに(2)と(3)を根拠に、彼は機械論的世界解釈における終局状態あるいは平衡状態を否定する。つまり、(3)現在の瞬間は存在の瞬間ではなく、生成の瞬間であるということから、終局状態あるいは平衡状態は少なくとも現在においては実現されていないことが証明され、もし仮に終局状態あるいは平衡状態が実現可能であるとしても、(2)時間は未来と過去の両面にわたって無限であるから、生成は終局状態あるいは平衡状態をすでに達成してしまっているはずだ、とニーチェは考えるのである。以上から、生成しはじめたこともなければ経過し終わったこともない、同一物の永遠回帰が導き出されるとニーチェは考える。

B. 永遠回帰思想の暗黒面（ニヒリズム）

「幻影と謎について」においては、「一切の真理は曲線的であり、時間自体が一つの円環である」と言われている。永遠回帰の世界とは、過去と未来の錯綜する円環的時間（永遠）を持つ世界なのである。この円環的時間においては、過去と未来の現在を境にした対立が解消され、同時に一般的時間理解における前後関係が成り立たなくなる。それゆえ、一般的時間理解しか持たない者にとっては、それは把握することが非常に困難なものである。それを承知の上であえて円環としての時間を表現すれば、次のような奇妙な外観を呈することになる。つまり、過去は未来から到来し、未来は過去に帰来する、未来は同時に過去、過去は同時に未来…とにかく、永遠に同じ軌道を描く円環である。

永遠回帰の世界とは、このような時間を持つ世界であるから、その内で生きる個々の人間の為し得ることの一切は、過去・未来の回帰において、すでに無限回にわたって為され・為されるであろうこと以外決してあり得ないことになる。そうだとすれば、人間のいかなる決断も、いかなる努力も、いかなる自己超克の意志もどうでもよいもの、何もそのかいたがないものとなり、どうしようもない徒労感が、ひいては生に対する否定が生じることになる。これこそが永遠回帰思想に含まれるニヒリズムに他ならない。ニーチェはこの思想のニヒリズムを「重力の精」（小びと）に次のように言わせている。

「『おお、ツァラトゥストラよ』と、彼〔小びと・重力の精〕は嘲笑するかのよう
に、音節を区切りながら、ささやいた、『おまえ、知恵の石よ！ おまえは自分を高く
投げたが、しかし、投げられた石は、いずれも必然的に——落下するのだ！ お
お、ツァラトゥストラよ、おまえ、知恵の石よ、おまえ、投石器の石よ、おまえ、
星を粉碎する者よ！ おまえは自分自身をこんなに高く投げた、——しかし、投げ
られた石は、いずれも——必然的に落下するのだ！

結局はおまえ自身に帰着すべく、自分の投げた石で自分を打ち殺すべく、断罪さ
れた者であるからには、おお、ツァラトゥストラよ、おまえはいかにも石を遠くへ
投げはしたが、——しかし、石は結局また、おまえの上に落ちてくるだろう！』^(註17)

ニーチェの永遠回帰思想そのものがニヒリズム的性格を有している。この思想において
は、或る意味でくすべては同じことだ、何もそのかいたがない」ということ、いかなる終局
目標もないということが永遠化される。永遠回帰が真実だとするならば、従来のすべての
目的論的世界観は、当然これによって否定されてしまう。その限りで、これはもともと意
気沮喪させる思想、「ニヒリズムの極限形式」^(註18)なのである。

特にツァラトゥストラその人にとっては、この思想の暗黒面は人一倍耐え難いものとな
る。というのは、彼は様々な教説において、「人間は超克されるべきところの、何ものか
である」と人々に説き、惰性で慣習に従うだけの卑小な生の超克を促してきたからである。
ニーチェは永遠回帰思想の暗黒面を、若い牧人の喉に這い込み窒息させる「黒く重いヘビ」
という比喩を用いて表すが、ツァラトゥストラにとっての「黒く重いヘビ」は、卑小な人
間の永遠の回帰に集約されることになる。「ああ、人間が永遠に回帰する！ 卑小な人間が
永遠に回帰する！」^(註19)

C. 永遠回帰思想との対決

永遠回帰思想の暗黒面（ニヒリズム）のおおよそのところは以上で明らかだと思うが、では、『ツァラトゥストラ』の物語において、主人公ツァラトゥストラはいかにしてこの思想の暗黒面を克服し、この思想を体得するのか。その手がかりとなるのが、先に引用した「重力の精」（小びと）のニヒリスティックな思想に対するツァラトゥストラの言葉である。

「わが身のうちには、わたしが勇気と呼ぶものがある。それが、これまで、わたしのあらゆる落胆を殺害してくれたのだ。」^(註20)

上の引用に続く箇所では、ツァラトゥストラの内なる「勇気」が、ツァラトゥストラに「小びとよ！ おまえか！ それともわたしかだ！」と二者択一的に決定することを命じ、さらにこの「勇気」は「これが生であったか？ よし！ もう一度！」と言って、生のうちにあるあらゆる苦悩も、死による苦悩からの救済も打ち殺す、と述べられている。ここで言われている「勇気」とは、ツァラトゥストラの超人的な意志力とほぼ同義であるが、ツァラトゥストラが永遠回帰思想のニヒリズムを克服し、この思想を体得する際、この超人的「勇気」（意志力）が極めて重要な役割を果たすことになる。ツァラトゥストラは「回復しつつある者」という章で永遠回帰思想と対決し、「黒く重いヘビ」の頭を噛み切る（ニヒリズムの克服の比喩）ことになるのだが、この戦いに臨む前に、彼は自分の意志に次のように呼びかける。

「おお、意志よ、一切の困難の転回（Wende aller Noth）よ、おまえ、わたしの必然性（Nothwendigkeit）よ！ 一つの大きい勝利のために、わたしを取っておけ！」^(註21)

ツァラトゥストラの自分の意志への呼びかけを念頭において、彼の永遠回帰思想との対決を解釈すれば以下ようになる。ツァラトゥストラは自らの超人的「勇気」（意志力）をもって、永遠回帰思想の恐るべき側面（ニヒリズム）に立ち向かう。そして彼は、卑小な人間もまた永遠に回帰するという彼にとっての最大の困難（Noth）を、超人的「勇気」（意志力）をもって、転回（wenden）し、厳然とした必然性（Nothwendigkeit）をもって永遠に回帰する世界と一体化する、と。つまり、ツァラトゥストラは、永遠回帰の思索者という立場、言い換えれば、世界を何らかの形で対象化・客観化する立場（いわば外から眺める立場）から、永遠に回帰する世界そのものと一体となる境地に飛躍するのである。彼が永遠回帰思想のニヒリズムを克服するということは、彼が忌み嫌った卑小な人間の存在を世界から排除することではなく、そういった存在をも含むものとしての必然的世界を真に認識するということと同じである。世界の内の一切の対立や相剋の様相そのままに、あるがままの世界の全体を永遠に肯定する境地こそ、ツァラトゥストラの最終的な到達点なのである。

おわりに

永遠回帰のニヒリズムを超人的な意志力により克服し、世界との一体化の境地に飛躍す

ることによってツァラトゥストラに開けてくる世界とは、「真の世界」と「仮象の世界」という対立関係によって、常に貶められつづけてきた唯一現実のあるがままの世界である。このあるがままの世界を再発見し、この世界にあくまでも立脚することによって、「真の世界」と「仮象の世界」という二世界論的対立を越えること、それが『ツァラトゥストラ』が物語るヨーロッパのニヒリズムを克服する道である。ここには、ヨーロッパのニヒリズムをその原因に遡って克服し、未来の歴史を始めようとするニーチェの思想の核心が語られているのである。

注

- 1：『偶像の黄昏』『或る反時代的人間の遊撃』5
- 2：『善悪の彼岸』序文
- 3：『偶像の黄昏』『私が古人に負うところのもの』2
- 4：『悦ばしき知識』343
- 5：『反キリスト者』1
- 6：『権力への意志』12, 13
- 7：同, 2
- 8：同, 1
- 9：同, 30
- 10：同, 583
- 11：同, 3
- 12：『悦ばしき知識』357
- 13：同, 1
- 14：同, 3
- 15：『偶像の黄昏』
- 16：『ツァラトゥストラはこう言った』『幻影と謎について』2
- 17：同, 『幻影と謎について』1
- 18：『権力への意志』55
- 19：『ツァラトゥストラはこう言った』『回復しつつある者』2
- 20：同, 『幻影と謎について』1
- 21：同, 『新旧の板について』30

参考文献

- 本論文における『ツァラトゥストラ』からの引用は、
Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bände, herausgegeben
von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter (1988) の第4巻による。
その他のニーチェの著作からの引用もこの版による。
- ・『ツァラトゥストラ』の邦訳
- 氷上 英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』(岩波文庫) 1970
高橋・秋山訳『こうツァラトゥストラは語った』(世界の大思想25) 河出書房新社 1969
手塚 富雄訳『ツァラトゥストラ』(世界の名著45) 中央公論社 1966

吉沢伝三郎訳『ツァラトゥストラ』(ちくま学術文庫版ニーチェ全集第9・10巻) 1993

・伝記的事実に関しては

- フレンツェル, I. 『ニーチェ』(ロコロ伝記叢書) 川原栄峰訳, 理想社, 1983
川原 栄峰訳『この人を見よ』(ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第15巻) 1994
塚越 敏訳『ニーチェ書簡集I』(ちくま学芸文庫版ニーチェ全集別巻1) 1994
ザロメ, L. 『ニーチェ 人と作品』(ルー・ザロメ著作集3) 原佑訳, 以文社 1986

・総括的なニーチェ思想に関しては

- ドゥルーズ, G. 『ニーチェと哲学』 足立和浩訳, 国文社 1983
フィンク, E. 『ニーチェの哲学』 吉沢伝三郎訳, 理想社 1963
原 佑著『ニーチェ 時代の告発』 以文社 1971
ヤスパース, K. 『ニーチェ』(ヤスパース選集18, 19) 草薙正夫訳, 理想社 1966
レーヴィット, K. 『ニーチェの哲学』 柴田治三郎訳, 岩波書店 1960
ミュラーラウター, W. 『ニーチェ・矛盾の哲学』 秋山・木戸訳, 以文社 1983
山 崎 庸 佑『ニーチェ』 講談社学術文庫 1996

・永遠回帰思想に関しては

- バタイユ, G. 『オベリスク』, 『ニーチェの笑い』(『ニーチェの誘惑—バタイユはニーチェをと
う読んだか』 P78~101, P111~126)
吉田裕訳, 書肆山田 1996
園 増 治 之『ニーチェ 解放されたプロメテウス』 P134~166, 創文社 1990
原 佑訳『権力への意志』(ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第12・13巻) 1993
原佑・吉沢訳『生成の無垢』(ちくま学芸文庫版ニーチェ全集別巻3・4) 1994
平 木 幸三郎『ニーチェの『運命愛』について』(実存思想協会編, 実存思想論集IX『ニー
チェ』 P43~68) 理想社 1994
レーヴィット, K. 『世界を取り戻そうとするニーチェの試み』(『神と人間と世界』 P151~192) 柴
田治三郎訳, 岩波書店 1973
レーヴィット, K. 『ニーチェにおける永遠回帰説の取り戻し』(『世界史と救済史』 P277~292) 佐
太・長井・山本訳, 創文社 1964
町 田 輝 雄『ニーチェにおけるニヒリズムと永劫回帰説』(中原・新田編『ニーチェ読解』
P165~184) 早稲田大学出版部 1993
三 富 明『永劫回帰思想と啓蒙の弁証法』 理想社 1995
新 田 章『『神の知的愛』と『運命愛』』(中原・新田編『ニーチェ読解』 P211~254) 早
稲田大学出版部 1993
信 太 正 三『ニヒリズムと永遠回帰』『ニーチェ研究』 P194~249) 哲書房 1980

・その他

- 大石・大貫・木前・高橋・三島編集『ニーチェ事典』 弘文堂 1995
三 島 憲 一『ニーチェ』(岩波新書) 1987
青 木 隆 嘉『ニーチェを学ぶ人のために』 世界思想社 1995